



TITLE:

木村博士のことども

AUTHOR(S):

石川, 榮助

---

CITATION:

石川, 榮助. 木村博士のことども. 天界 1937, 17(193): 253-256

ISSUE DATE:

1937-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167467>

RIGHT:

## 木村博士のことども

水澤緯度観測所 石川 榮 助

昨年12月8日 秩父の宮兩殿下が緯度観測所へお成遊ばされた時、御説明申し上げた木村榮博士に、『何故中央局が伊太利に移つたか、』との長多い御下問を賜り、又其の日、一の關まで御送りの節は十數分間の御同車を許され、身體に氣をつけられる様との優渥な御言葉を戴き、學者として身に餘る光榮に浴した。木村博士の如何に國寶的存在であるかがこれによつても知られよう。

博士が中央局長を勇退されたのは昨年1月6日であつた。嘗てZ項の論文を發表した1月6日だつたのが奇である。

顧みれば西曆1895年、博士が大學院時代に東京にて我國最初の緯度観測をやり、成績を上げ、1899年に萬國共同緯度観測所が水澤に設置されるや、所長として30の若さで赴任したのであつた。英才な博士の観測は時の中央局ボツダム天文臺より認められず、責任感の烈しい博士は辭職しても相濟まぬと日夜苦心し、1901年9月の或日テースの後、何氣なく机を開けた瞬間、Zの存在が閃めいたのであつた。翌年1月6日、萬國天文學界は此のZ項の論文に震駭されたのであつた。緯度観測2年そこそこでかくも偉大な發見をこうした機會になした事はニウトンの林檎の逸話に比すべきものであらう。

1904年には理學博士の學位を得。1911年には帝國學士院が其の最初の恩賜賞を與へ、其の前年には世界一流の學者のみが推薦される天文最高の學會、英國王立天文學會會友に推され、緯度變化の王座への道が坦々として開かれたのであつた。

1922年の萬國學術研究會が生れて其の第1回の會合がローマに開かれた時の事である。此の大會の緯度變化の委員長は誰れあらう我が木村博士其の人であつたのだ。當時観測所は世界大戰の爲め水澤、ウキヤ(米國)、カルロフォルテ(伊國)の3ヶ所のみで、シンシナチ(米國)、チャルデュ(露領)が廢止し、ガィザースバグ(米國)が中止してゐた。中央局が獨國にある爲め都合悪く、中央局の所在地が問題となつた。當時何んでも世界一をもつて任じ

てゐた米國が委員長に默つて之れを引受けようと申し出た。伊太利は憤慨した。木村委員長は虚心坦懐、日本人にしてよく議事をとり、伊太利と懇談し、遂に中央局が日本に移されるに至つた。こゝに於て我が木村博士は水澤緯度觀測所々長、中央局長、緯度變化天文學部委員長、緯度變化測地學部委員長を兼職し、海軍でいへば第一艦隊司令長官、聯合艦隊司令長官、軍令部長、海軍大臣といった様な緯度變化の最高部位を悉く占め、名實共に緯度變化の王座におさまつたのであつた。

顯職にあること15年餘、其の間に中止の觀測所、ガイザースバーグを復活させ、蘇領にキタップを増設し、更に南半球のアルゼンチンにラブラタ、濠洲にアデレード及赤道直下のジャバ島にバタビヤを新設し理論及實際を指導し、數多の論文を發表して、緯度觀測上有史以來の隆盛を見るに至つた。正に緯度觀測に於ける中興の主であらう。光榮に輝く眞最中に其の事業と研究を整理し、後繼者を立てようと昨年1月6日をもつて中央局長、緯度變化兩委員長を退き、直ちに萬國緯度變化名譽委員長になられ、今や全く自由な立場からZの問題を解析し、生命の限り研究されるのである。

萬國は其の勇退を惜しみ、其の功績を讃へ、1月27日には朝日賞、2月14日には英國王立天文學會金牌賞の受賞式が舉行されたのであつた。王立天文學會賞は世界一流の學者の粹に與へられるもので、アインシュタインの如きにして初めてなされるものである。兩賞の通知は博士が尊母の危篤の爲、郷里金澤に歸へられてゐた1月10日に朝日賞、翌々日に金牌賞の報があつて、尊母の他界が其の日其の時即12日午前2時頃だつた事は愈々もつて劇的であつた。

昨年の日蝕觀測は木村博士の總監督によつて重みを加へ、日蝕觀測の外人部隊は木村博士を慕つて續々來水した。6月28日にはチェツコ國立天文臺長を初め學者4名、7月7日には萬國天文協會幹事ケンブリッヂ大學教授ストラットン博士等木村博士に接し、満足して歸へつた。

此の秋は米國天文學會の名譽會員に推され、先月は兩殿下より優渥な御言葉を賜る等、木村博士の全生涯が今年の爲にのみあつたかの感がした。

博士の下には俊豪川崎技師あり、地震觀測の正確さを世界に轟かした鋭才池田技師あり、天體觀測の碩學、ドノホー賞受賞者奇才山崎技師あり、就中、

俊才川崎技師は1932—1934年の2ケ年半の外遊の途に、英國の緯度觀測を授け、研究し「太陰の位置に於ける經度及緯度の變化」の論はゆるぎなきステットソン博士の牙城に肉薄し一矢をむくいた。又次々の論文が英國及我が天文學會に發表され、1935年以來「夙に緯度變化の關係」の論には學術振興會が研究費を交附し、昨年9月學術協會は「日射と緯度變化」の論に天文としての第1回賞を與へた。グリニッチのZ項の論文は殆んど川崎技師のものせるもので最近は學位論文を完成したのだ。我が木村博士の喜びは如何ばかりだらうか。加ふるに近日浮游天頂儀が新設され、アデレードに貸してあるものが戻れば3基筒を並べて觀測される時一層其の喜びを深くするであらう。

木村博士のかかる大いなる榮譽は博士の英才は勿論、誰もやらなかつた緯度變化、緯度觀測に終始した事にもよるであらうが、筆者は博士の神に近い人格其のものが建設したものと信ずる。博士の孝心、博士の敬神、皇室に対する敬虔さには自づと頭が下がる。白髮童顔の笑顔は老牧師を思はしめ、研究時の風采は練達の劔士或は參禪中の居士を思はしめてゐる。博士の謠曲、博士の書、よく其の風格を示してゐる。石川龜章師範の兄弟子として水澤寶生流の元祖だつた博士の謠曲は、寂びて優雅な書と共に神品に近く、弓をよくし、南畫には日淺きも香り高く茶道の達人の梯をも感ずる。昨年夏、文藝春秋社より隨筆を依頼された時の事であつた。「隨筆とは何を書くのか知らないから斷つたよ」と洒々としておられた。博士はよく文春を読み、殊に隨筆に興味もたれてゐるのだから面白い。博士にこうした洒脱の風格あり、洒落を言ひ、座談の妙を體得され談論風發、口角泡を飛ばすに至つては便所へ立つても喋り續ける。又博士のテニスは理論テニスとして名あり、水澤のテニス、ピンポンの草分であつた。童心となられての遊びぶりは、ほほえましく、昨年の秋、所員の若手がテニスに興じてゐるのを研究室より見ておられ、堪りかねてノコノコと出馬し「君ラケットを貸し給へ」と言つて1ゲームに1球か2球来る球を追ふておられた。後で聞けば令夫人が博士の健康を心配し、ラケットを隠したのだとあつた。其の翌日も亦ラケットなしで來られた時は一同無上に嬉しくなつて、貞淑な夫人に叱られるかも知れないが實際嬉しくて博士萬歳を叫びたかつた。

博士は 健在である。水澤緯度観測所々長として 益々独自の 研究に 味到され、中央局以上の実績をあげておられる。

此處に國寶木村榮博士の健在を報じ、併せて尚々學會のため御健勝を祈つて止まない。

因みに博士は明治3年9月10日金澤市に生れられた。——12年1月6日——

編者附記：—— 畏き邊りでは我國文化の創造、發展に功勞のあつた人々を表彰される思召により御制定遊ばされた文化勳章の第1回拜受者9氏中、木村博士もその光榮に浴され、去る4月28日勳章が傳達されました。此處に同博士の名譽を祝福する次第です。

## 日 食 観 測 隊 出 發

既報の通り、山本博士、柴田、堀井兩氏の一行は豫定通り29日の夜京都を出發した。山本教授は1日15時氷川丸で横濱出帆。柴田、堀井兩氏は豫定より1日遅れて6日18時ノルエ1丸で出帆、只今は太平洋で荒浪と闘つてゐる筈。何れニュースは到着次第續報する豫定である。

★ ☆ ★ ☆ ★

★ 金 星 ★

伊 東 祐 大

今宵も君はパラシュートのやうに南天に懸つて  
例の燈火信號をつゞけるのだ

「美しく生き給へよ」と綠色で  
「少し情熱をもつてね」と黄色で  
「潔白にね」と白色で

三つの色がのぞき硝子のやうに廻り  
勳章のやうに光つて信號をつゞけながら  
今宵も君は南の空低く落ちてゆくのだ